

第25回企画展

永井陽子ふたたび

— 没後25年 —



写真「永井陽子」
伊藤邦子氏提供

二〇二五年の今年、歌人・永井陽子（一九五〇〜二〇〇〇）の没後二五年にあたる年です。

永井は、愛知県瀬戸市に生まれ、瀬戸高校在学中に短歌結社「短歌人会」に入会し、一九七三年に句歌集『葦牙』を刊行して以降、計六冊の歌集を発表しました。

永井没後、彼女の自筆資料や蔵書等の関係資料は、旧大宮市で構想された（仮称）大宮文学館のため、ご遺族より旧大宮市へご寄贈いただき、現在はさいたま市立大宮図書館で資料の保管・整理を行っております。今回、永井の没後二五年をむかえ、永井の自筆資料等を展示いたします。展示会を通して、改めて永井陽子作品の魅力に触れる機会となりましたら幸いです。

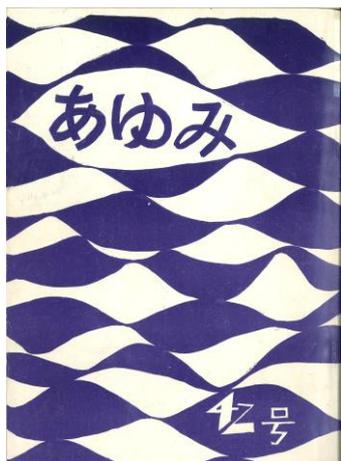
最後になりましたが、本展開催にあたり、伊藤邦子様、江戸雪様、大西美千代様、愛知県立瀬戸高校をはじめ、ご協力いただきました皆さまに、心より感謝申し上げます。

さいたま市立大宮図書館

文学少女からうたの世界へ

歌人・永井陽子ながい ようこは、一九五一（昭和二六）年四月十一日、愛知県瀬戸市あいち けんせとに生まれました。愛知県立瀬戸高等学校に進学した永井は、高校在学中に短歌結社「短歌人会」に入会し作品を投稿しはじめました。また、瀬戸高校の学校誌「あゆみ」四二号には永井の短歌などが掲載されています。

高校を卒業した永井は、愛知県高辻県税事務所に就職、同時に愛知県立女子短期大学（夜間）の国文科に入学しています。同短大在学中の一九七一年に「太陽の朝餉」の題で応募した五〇首が、新人歌人の登竜門「角川短歌賞」の候補になります。惜しくも受賞は逃しましたが、一九七三年に刊行された句歌集『葦あしに作品の一部が収録されています。



学校誌「あゆみ」42号 (No.1)

永井陽子が在籍していた、愛知県立瀬戸高校の学校誌です。この本は、永井が高校3年生の時に作成されたもので、「白い夢の中で」と題した短歌と俳句、そして小説「太陽の朝餉」が掲載されています。若い頃、永井は俳句も作っていましたが、のちに短歌に専念することになります。

短大卒業の翌

年、一九七三年に父・信一が亡くなり、母との二人暮らしがはじまりました。家族との別れという辛い経験をした永井ですが、友人たちと同人誌「詩線」しせん（一九九二年まで刊行、全三二号）を刊行したり、東洋大学国文科（通信課程）に編入学するなど、向上心を持って活動していました。

一九七八年、永井は第二歌集『なよたけ拾遺』しゅういを刊行します。当時は多くの歌人たちが自分の私生活を題材にした短歌を詠んでいましたが、永井は劇作家・加藤道夫かとう みちおの戯曲「なよたけ」を題材にした作品をはじめ、短編小説と短歌を組み合わせた作品など、あえて自身のことではなく物語の世界を短歌で表現することに挑戦しました。この歌集で、永井は「現代歌人集会賞」を受賞しています。



▲同人誌「詩線」1号 (No.4)
永井が、学生時代の友人である詩人・大西美千代らとともに創刊した雑誌です。



夜は夜のあかりにまわるティーカップ
ティーカップまわれまわるさびしさ

『葦牙』

明るい昼間の遊園地とは違って変わり、
夜の電灯の中を回り続けるティーカップ
にどこか寂しさを感じました。あえて同
じ言葉を繰り返すことにより、歌のひび
きを作り出しています。

うたはふしぎな楽器

『なよたけ拾遺』の刊行後、永井は愛知県立図書館で働き始めます。図書館での仕事にやりがいを感じていた永井は、後年、自身が作成した年譜に「この館で、以後十年間、知人友人に恵まれて楽しい日々を送る」と書いています。忙しくも充実した日々を送っていた一九八三年、永井は第三歌集『樟かぎの木きのうた』を刊行しました。

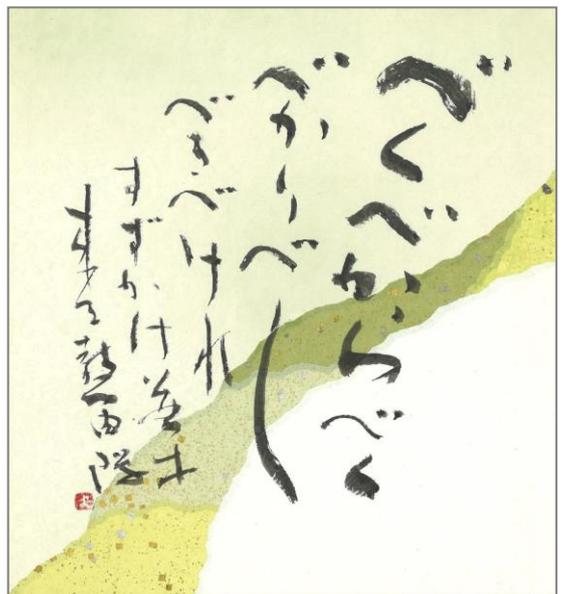
また、ちょうどこのころ、短歌の世界では女性歌人たちがシンポジウムなどを通じて、自分の意見を発表する動きが活発になっていました。永井も短歌について自分の意見を発表したり、いくつかのシンポジウムに参加しています。なかでも、一九八〇年に雑誌「短歌人」で発表した「再び第二の性を「女歌おんなうた」と呼ばれるものへの疑問」では、短歌を作者の性別で区別することへの否定的な見解を示しています。



▲雑誌「短歌人」1980年3月号(No.12)「再び第二の性を「女歌」と呼ばれるものへの疑問」が掲載された

一方、もともとクラシック音楽が好きだった永井は、一九八四年にモーツァルトのオペラ「魔笛てき」を見て大きな感銘を受けます。このころから、短歌と楽器を結びつけるようになったという永井は、一九八六年に刊行した第四歌集にも『ふしぎな楽器』という題名をつけています。また、歌集刊行の翌年に発表したエッセイ「楽器」ではその関係について、次のように語っています。

「およそこの世のものはみな、さまざまなる楽器。なかでも、短歌は、とりわけふしぎな言葉の楽器である」



▲自筆色紙「べくべからべくべかりべしべきべけれすずかけ並木来る鼓笛隊」(No.20)



助動詞「べし」の活用形で、並木通りを
歩く鼓笛隊の音を表現するという、永井
のリズム感覚がふんだんに発揮された短
歌です。数多くある永井の作品の中でも、
最も有名な歌として取り上げられます。

べくべからべくべかりべしべきべけれすずかけ並木来る鼓笛隊

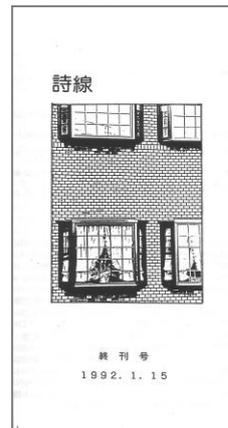
『樟の木のうた』

永井陽子のうた

一九九〇年、一緒に暮らしていた母・としが脳梗塞で倒れ、さらに翌一九九一年には、自身の愛知県立大学への異動により、やりがいを感じていた図書館での仕事を離れることになるなど、永井は困難な時期をむかえていました。約二年間の介護生活を経て母は亡くなり、住み慣れた瀬戸市から名古屋市へと転居します。

一九九三年、永井は第五歌集『モーツアルトの電話帳』を刊行します。また、一九九五年に愛知芸術センターを最後に公務員を退き、愛知文教女子大学短期大学の助教授として勤務しました。

転職と同じころ、永井は第六歌集『てまり唄』を刊行します。この歌集は、永井には珍しく母との暮らしなど私生活を歌った作品も収められました。そのあとがきでは、

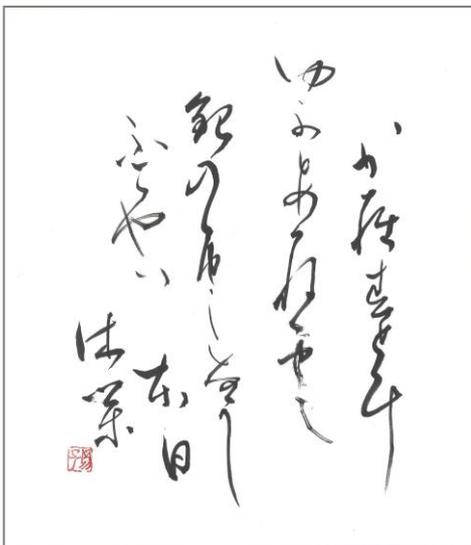


同人誌「詩線」終刊号(No.14) 友人たちと続けてきた、「詩線」の終刊号です。「詩線」は、11号以降は永井と大西の2人体制で刊行されるようになりました。永井は、長年愛読してくれた読者たちに、「愛読者の多かった(?)編集後記ももう読んでいただけないのが残念である」別れの言葉を書いています。

「どちらかというとし性の強いこれらの作品を人目に曝すだけの決心がつかないまま、稿は手元にねむって二年を越した」

と葛藤していた当時の心境を打ち明けています。

更なる活躍を期待されていた永井ですが、次第に体調を崩しがちになり、二〇〇〇(平成十二)年の一月二六日、四八歳という若さで亡くなりました。亡くなった同年には、遺歌集『小さなヴァイオリンが欲しくて』が刊行され、その後も二〇〇二年に遺稿集『モモタロウは泣かない』、二〇〇五年に『永井陽子全歌集』が刊行されています。また、現在でも雑誌等に特集記事が組まれるなど、永井の作品は今なお多くの人々に愛され続けています。



自筆色紙「ガラス戸にゆふあかねぐも銀の雲流し筆屋は本日休業」(No.19) 夕ぐれ時、ガラス戸には空の雲の様子が映っています。休日の筆屋の光景を物語のワンシーンのように読んでおり、「あかねぐも」と「銀の雲」を続けることで、歌にリズムを作りだしています。

BONBONといふ喫茶店ナベ屋といふ鍋屋師走の街に向き合ひ

『小さなヴァイオリンが欲しくて』

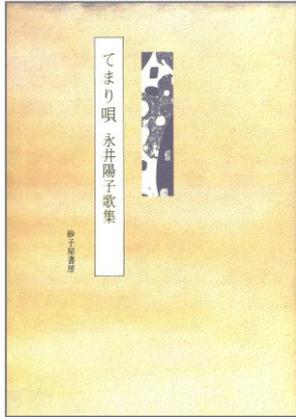
「ボンボン」は名古屋市にある喫茶店で、永井はこの店によく通っていました。「ボンボン」と、その向かいに建つ「鍋屋」という調理器具専門店を詠んでいます。

永井陽子略年譜

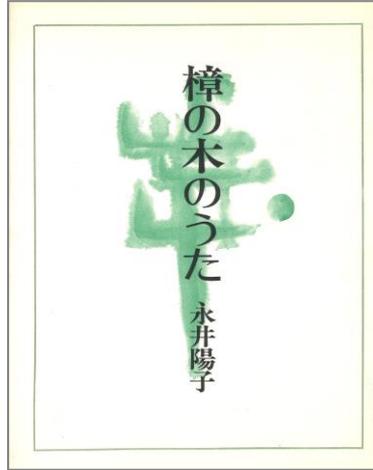
西暦	年齢	あゆみ
一九五一	〇	四月十一日、愛知県瀬戸市城屋敷町にて、父・信一と母・としの次女として生まれる。
一九六七	十六	愛知県立瀬戸高等学校に進学。学習雑誌に、短歌や俳句、詩などを投稿する。在学中は『平家物語』など古典文学に親しんだ。また在学中に「短歌人会」、俳句結社「齒車」に入会する。
一九七〇	十九	高校卒業後、愛知県高辻県税事務所で働く。同年、愛知県立女子短期大学(夜間)の国文科に入学。学校の文芸同好会の雑誌「轍」に参加する。劇団四季の舞台「なよたけ」を見る。
一九七一	二〇	「太陽の朝餉」五〇首が、第十七回角川短歌賞の候補となる。
一九七二	二一	「短歌人新人賞」を受賞する。短期大学を卒業する。
一九七三	二二	父・信一が死去(享年七十二)。「句歌集(第一歌集)」「葦牙」を刊行する。
一九七四	二三	愛知県立芸術大学音楽学部で事務職として働く。この年から一九八〇年まで雑誌「核」に作品を寄稿する。
一九七五	二四	短大時代の友人たちと、同人誌「詩線」を刊行する。東洋大学の通信教育部国文科に編入学する。司書資格を習得する。
一九七七	二六	論文「式子内親王―その百首歌の世界」を執筆する(第二歌集『なよたけ拾遺』に収録)
一九七八	二七	第二歌集『なよたけ拾遺』を刊行する。 第四回「現代歌人集会賞」を受賞する。
一九八〇	二九	東洋大学を卒業する。「短歌人賞」を受賞する。「歌人集団・中の会」の発足に参加する。
一九八一	三〇	「短歌人」編集委員となる。愛知県立図書館に異動する。現代歌人協会の会員となる。
一九八三	三二	シンポジウムへ女・たなか・女に参加する。 第三歌集『樟の木のうた』を刊行する。
一九八四	三三	シンポジウムへ歌うならば、今に参加する。モーツアルトのオペラ「魔笛」に感銘を受けて、このころから「短歌はふしぎな楽器」と考えるようになったといわれている。
一九八五	三四	「シンポジウム(三十一文字集会)」に参加する。

西暦	年齢	あゆみ
一九八六	三五	第四歌集『ふしぎな楽器』を刊行する。
一九八九	三八	この年より二年間、母校の愛知県立女子短期大学で非常勤講師として勤務、現代短歌を教える。学生たちと時に歌会も開催したという。
一九九〇	三九	母・としが脳梗塞で倒れ入院する。
一九九一	四〇	愛知県立大学外国語学部に移動する。選歌集『なよたけ抄』を刊行する。
一九九二	四一	同人誌「詩線」が終刊になる。書籍『同時代としての女性短歌』の座談会に参加する。
一九九三	四二	母・としが亡くなる(享年八一)。瀬戸市から名古屋市中名東区高社に転居する。 第五歌集『モーツアルトの電話帳』を刊行する。
一九九四	四三	愛知県芸術文化センターに移動する。
一九九五	四四	愛知県芸術文化センターを最後に公職を退く。愛知文教女子短期大学の助教になる。 第六歌集『てまり唄』を刊行する。 第六回「河野愛子賞」を受賞する。名古屋市中東区榎木町に転居する。
一九九九	四八	肝炎のため入院する。
二〇〇〇	四八	一月二六日に死去する(享年四八)
二〇〇〇		没 後
二〇〇〇		遺歌集(第七歌集)『小さなヴァイオリンが欲しくて』が刊行される。 このころに旧大宮市で構想されていた「大宮文学館」(仮称)のため、ご遺族から旧大宮市へ永井陽子関連資料が寄贈される。
二〇〇二		生前のエッセイを集めた、遺稿集『モモタロウは泣かない』が刊行される。
二〇〇五		『永井陽子全歌集』が刊行される。
二〇一三		永井陽子の母校・愛知県立瀬戸高等学校と同窓会「松翠会」が主催する「永井陽子短歌大賞」がはじまる。
二〇二一		大宮図書館にて、企画展「歌人・永井陽子 歌はふしぎな楽器」が開催される。
二〇二五		大宮図書館にて、企画展「永井陽子、ふたたび没後25年」が開催される。

永井陽子歌集



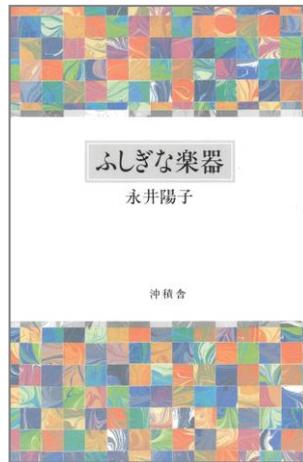
第六歌集
『てまり唄』
砂子屋書房 1995年



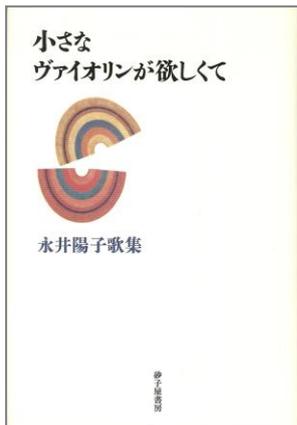
第三歌集
『樟の木のうた』
短歌新聞社 1983年



句歌集(第一歌集)
『葦芽』
愛知県立女子短期大学文芸部
1973年



第四歌集
『ふしぎな楽器』
沖積舎 1986年



遺歌集(第七歌集)
『小さなヴァイオリンが欲しくて』
砂子屋書房 2000年



第二歌集
『なよたけ拾遺』
短歌人会 1978年



第五歌集
『モーツァルトの電話帳』
河出書房新社 1993年

永井陽子と

おおいにしたみこ

さいたまゆかりの歌人・大西民子

一九五一（昭和二六）年生まれの永井陽子に対して、戦後まもなく岩手から大宮に移住した女性の歌人・大西民子は一九二四（大正十三）年に生まれており、永井にとって民子は歌人として先輩にあたる存在でした。

永井は愛知、民子は埼玉を活動拠点としていたためか親しく交流していたという記録は残っていません。しかし、永井が本格的に歌人として活動を始めたころには、民子は『まぼろしの椅子』と書いた歌集で広く知られる存在となっていました。書籍『「同時代」としての女性短歌』（河出書房新社 一九九二年刊）の座談会に参加した永井は、民子の第一歌集『まぼろしの椅子』に収録されている、



▲写真「永井陽子」
伊藤邦子氏提供

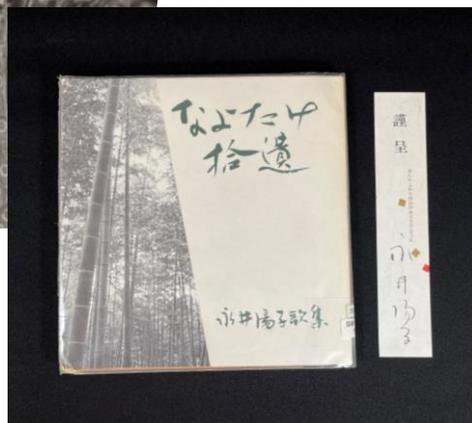
學問する程女は不幸になるといふ論に反撥しつ
つ寂しくなりぬ

という短歌を、昭和二一年から三九年を代表する歌のひとつとして紹介しています。民子は、女性の進学が珍しかった戦前に、奈良女子高等師範学校（現・奈良女子大学）に通うことができましたが、一方で結婚後は夫との不仲に悩みの多い日々を送っていました。だからこそ、「勉強する程女性是不幸になる」という説に反発と、「そうかもしれない」と思う気持ちの両方を感じたのでしよう。永井は、この民子の短歌に同じ女性として思うところがあつたのかもしれない。

また、友人と作った同人誌「詩線」の十六号にて、永井は感情を詠んだ短歌というテーマでエッセイを書いており

三十一音の内に「感情」の背景や経緯までを盛り込むのはむずかしい。そこを踏み越えた時にだけ、すぐれて普遍的な感情が作品として表現されるのではないか

と記し、その中でも優れたもののひとつとして、民子の第二歌集『不文の掟』に掲載の、



▲写真「大西民子」
当館蔵

民子蔵書『なよたけ拾遺』▶
当館蔵
永井から寄贈されたと思われる

夢のなかといへども髪をふりみだし人を追ひる
きながく忘れず

という歌を紹介して、「髪ふりみだし哭くことが主題ではない。しずめかねる心を恥しみ、凝視し、人は哭かない。」と評しています。

そして、二人は図書館で働いていたという共通点もあります。永井は一九九六年、歌人・久々湊くぐみからインタビューを受けた際、久々湊が大西民子も図書館で働く歌人だったことに触れたのに対して、民子の時代は紙媒体によるアナログ方式の管理をしていたが、自分のころには電子媒体が普及して図書館業界も様変わりしたと答えています。このことから、自分と近い経歴を持つ歌人としても意識していたようです。

民子は、永井が第五歌集『モーツァルトの電話帳』を刊行した頃に亡くなりました。晩年の民子は、永井のことを自分の後に続く新世代の歌人として見ていたのかもしれませんが。

※インタビューは、のちに『歌の架橋―インタビュー集―「二」』(久々湊盈子著 砂子屋書房 二〇〇九年刊)に掲載

企画展「永井陽子ふたたび―没後25年―」展示資料目録

番号	種別	資料
一	冊子	『あゆみ』四二二号 愛知県立瀬戸高等学校編集・発行 一九七〇年発行
二	雑誌	「短歌人」一九七二年一月号 掲載歌「手の中で透明になってしまふまで秋 弄ぶ君のイニシャル」
三	書籍	句歌集『葦牙』一九七三年刊行・初版 愛知県立女子短期大学文学芸部 掲載歌「夜は夜をあかりにまわるティーカップ ティーカップまわれまわるさびしさ」
四	冊子	「詩線」一号 大西美千代編集・発行 一九七五年十一月十日刊行
五	冊子	「詩線」五号 大西美千代編集 ぐるうぶ詩線発行 一九七七年十二月三十一日刊行
六	冊子	「詩線」九号 大西美千代編集 ぐるうぶ詩線発行 一九七九年五月一日刊行
七	書籍	第二歌集『なよたけ拾遺』一九七八年刊行・初版 短歌人会 掲載歌「いつの世の昔語りの竹の里をさなきひとのまみに照る月」
八	雑誌	「短歌研究」一九九三年六月号 掲載エッセイ「はるか遠い時代からの声」
九	書籍	永井陽子所蔵 式子内親王関連本
十	書籍	第三歌集『樟の木のうちた』一九八三年刊行・初版 短歌新聞社 掲載歌「やさしく低く朝けの風に呼ぶこゑとなりて歌はむ樟の木のうちた」
十一	冊子	「歌人集団・中の会 会報」No. 九 掲載評論「脱・もとのもくあみ」
十二	雑誌	「短歌人」一九八〇年三月号 掲載評論「再び第二の性を「女歌」と呼ばれるものへの疑問」
十三	書籍	第四歌集『ふしぎな楽器』一九八六年刊行・初版 沖積舎 掲載歌「春雷が今し過ぎたる路上より起ちしなやかにfは歩む」
十四	冊子	「詩線」終刊号 一九九二年一月十五日刊行
十五	書籍	第五歌集『モーツァルトの電話帳』一九九三年刊行・初版 河出書房新社 掲載歌「ひまはりのアンダルシアはとほけれどとほけれどアンダルシアのひまはり」
十六	書籍	第六歌集『てまり唄』一九九五年刊行・初版 砂子屋書房 掲載歌「鹿たちも若草の上になねむるゆゑおやすみ阿修羅おやすみ迦楼羅」

番号	種別	資料
十七	写真 (コピー)	「犬を抱えた永井陽子」 一九九八年撮影
十八	書籍	遺歌集『小さなヴァイオリンが欲しくて』二〇〇〇年刊行・初版 砂子屋書房 掲載歌「BONBONといふ喫茶店ナベ屋といふ鍋屋師走の街に向き合ひ」
十九	自筆色紙	「ガラス戸にゆふぐれあかねぐも銀の雲流し筆屋は本日休業」 永井陽子筆
二〇	自筆色紙	「べくべからべくべかりべしきべけれすずかけ並木来る鼓笛隊」 永井陽子筆

資料一 愛知県立瀬戸高等学校蔵 資料十七 朝日新聞社提供
右記以外の資料はさいたま市立大宮図書館所蔵です

会場内展示パネル【エッセイ・評論】

資料	初出掲載資料
エッセイ「魅せられて私の歌“道標ワルガキと百人一首”」	「NHK短歌」一九九六年一〜二月号
エッセイ「グループ・ライブル ケンカ風 詩線」	「短歌現代」一九七九年三月号
エッセイ「楽器」	「共同通信」一九八七年二月七日号
評論「脱・もとのもくあみ」	「歌人集団・中の会 会報」No. 九
エッセイ「三十一文字電話秘話」	「読売新聞」一九九四年三月一七日

主な参考文献

- 『永井陽子全歌集』永井陽子著 桐葉書房 二〇〇五年
- 『永井陽子全句集』永井陽子著 林桂編 蠶の会 二〇〇三年
- 『モタロウは泣かない』永井陽子著 ながらみ書房 二〇〇二年
- 『歌の架橋―インタビュー集―』久々湊 砂子屋書房 二〇〇九年
- 「歌壇」一九九一年十一月号、二〇〇三年十一月号、二〇〇五年二月号 本阿弥書店
- 「短歌人」二〇〇〇年八月号、短歌人会
- 「短歌」二〇〇三年八月号、二〇一四年五月号 角川文化振興財団

* 著作権には十分配慮していますが、お気づきの点がございましたらご連絡ください。

2025年3月5日発行
さいたま市立大宮図書館
埼玉県さいたま市
大宮区吉敷町1-124-1
電話 048-643-3701
FAX 048-648-8460